

雲仙普賢岳の噴火に思う

島 津 光 夫*

雲仙岳が噴火をはじめから一年近くになる。死者41名をだした6月3日の火砕硫の流出からさえ四ヶ月余をへた。10月中旬仙台で開かれた火山学会秋季大会で、火山ガスの性質の変化から終息に向かっているという発表があったと報道されている一方、溶岩ドームは最大級に成長したと現地から報道されている。いったい、いつまで続くのだろうかと良く聞かれる。

眉山の山体が大崩壊し、対岸まで津波が襲い、15,000人の死者をだし、「島原大変肥後迷惑」(1792年)として歴史に名を残した雲仙火山の噴火から198年ぶりに今回の噴火が起こったと言われている。今回の噴火は噴火の様式、噴火予知、火山防災などで多くの教訓をわれわれに与えている。

雲仙火山は「別府-島原地溝」とよばれるグラーベンの西端に位置する火山で、日本列島の中でも特殊な位置を占め、現在もこのグラーベンは南北方向に少しずつ開いており、沈降もしていることが観測されている。この地溝には鶴見、由布、九重の火山があり、有数の地熱地帯となっている。

普賢岳のデイサイトの溶岩ドームの形成とその崩落による火砕流の多発は、一般市民にも“火砕流”という言葉をやきつけた。火砕流とは狭義では高温のガスと粉体(火山灰)の混合物の乱流である。いくつかの発生のしかたが知られているが、直接目の前で観察できる場合が少なく、火砕流はもくもくとあがる熱雲の降下したものだというイメージが強く、教科書にも書いてある。今回のように、頻繁にドームが崩落し、火砕流が発生するとはあまり想像してこなかった。同じ頃噴火したフィリッピン島のピナツポ火山の火砕流と比べると小規模なものであるが、6月3日の火砕流の跡をみると、高温の火砕流の恐ろしさがわかる。世界中の火山を見て廻ったフランスのクラフト夫妻も想像していなかったためか犠牲になってしまった。

つい最近まで、活火山、休火山、死火山に区分されてきたが、有史以来はじめての御岳火山の噴火や今回の噴火のように、休火山と思われていた火山が活動した例をみると全く油断はできない。新潟県下にも9つほどの火山があり大部分は休火山ないし死火山とされている。たしかに苗場火山は30万年以上も古く、浅草、守門はそれよりも古いので心配ないが、焼山

* 新潟女子短大学長

だけでなく妙高火山あたりも安心できない。とくに最近のようにリゾート開発が進むと思われぬ災害を起しかねない。人間の少なかった時代には、多くの火山が今回のように火砕流や泥流の流出を繰り返し、美しい円錐形の火山をつくり、山麓の扇状地はその後農耕の場となったものであろう。したがって噴火はきわめて自然な地球の営みであったろうが、人間の生活がからまると災害となってしまう。

南米コロンビアのネバドデルルイス火山の場合は噴火被害予想図ができあがっていたが有効に利用されなかったために、土石流に襲われ、2万5千人にのぼる死者をだしてしまった。雲仙でも噴火が始まった後、短期予想のために航空写真やシュミレーションによる被害予想図の作成が要望され、一部はできていると聞いている。しかし、危険を予想される日本の多くの火山で被害予想図が公表されたら、大恐慌をきたすともいわれている。要注意の火山の周辺には大きな観光資源があるからである。それでは防災はどうしたらよいか、科学者や技術者が悩むところである。

一方、噴火予知や広く火山研究に取り組んでいる火山学者の側に問題はないだろうか。九大島原火山観測所の太田一也所長の顔をテレビでみていると、同情したくなる。現地の火山学者は住民の生活なり行政との板ばさみで苦勞していることと思う。一極集中的な日本では、火山噴火予知連絡会と現地とのあいだに不協和音もあるやに聞いている。危険で近寄れない火山の観測に火山観測の元締めのお官庁の気象庁さえ自前の観測用の航空機が持てず、自衛隊にたよるといふありさまである。

いろいろな角度から火山を研究している人たちが日本中から現地を訪れているとのことである。この機会を逃さず、生きた研究材料を料理したいと思うのは研究者の心情である。幸い、不用意な発言があまり聞こえてこないが、研究至上主義になって住民の不信をかかわないようにして貰いたいものだ。また観測や研究の体制がうまく機能しているだろうか。火山学会のプログラムをみたら、全部で170ばかりの講演の中で70ばかりの講演が雲仙岳噴火に関係したものである。百家争鳴もよいが、バラバラで何か異常のような感じをうけた。ともあれ、多くの研究が当面の雲仙の噴火の予測や防災、ひいては日本の多くの火山の噴火予知や防災に役立つよう願わざるをえない。

それにしても研究とは別の次元の問題であるが島原の被災者に緊急の対策が講じられることを切に望むものである。